

私大環協ニュース

私立大学環境保全協議会

第78号 2025.6

Environmental Protection Association of Private Universities NEWS



総会・研修研究会 会場
(慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス)



講演会場の様子



特別企画(保護具着用管理責任者講習)の様子

第41回総会・研修研究会

私立大学環境保全協議会
Environmental Protection Association of Private Universities

2025.
3.13(木) 14(金)

慶応義塾大学 湘南藤沢キャンパス
神奈川県藤沢市遠藤5322

オンサイト参加にあたり、特別な配慮を希望される方は、申込時にご希望の内容をお知らせください。事前にご相談のうえ、できる限りの対応をさせていただきます。

3月13日(木)	3月14日(金)
<総会> 13:00-13:30	<研修研究会> 9:30-12:20
<研修研究会> 13:30-17:20	9:30-11:00 グループ討議
13:30-13:40 開会挨拶	11:20-12:10 昼食提供
13:40-13:50 開会校挨拶	「多様化する大学の環境安全」
13:50-14:40 特別講演	大学等環境安全協議会 会長 大島 義人
「カーボンニュートラルに向かう世界の動向」	<サテライト見学会> 12:30-13:30
慶応義塾大学 特別招聘准教授 有野 洋輔	
14:50-15:40 研修講演	特別企画 保護具着用管理責任者講習会
「環境省の脱炭素施策と慶応大学SFCでの取組について」	3月12日(水) 13:00-17:20
慶応義塾大学 准教授 和田 直樹	13日(木) 9:50-12:00
16:00-17:20 グループ討議	労働安全衛生規則の改正により保護具を使用する際に選任が義務となった保護具着用管理責任者の法定講習を実施します。別途ご案内を参照ください。
<情報交換会> 17:30-19:00	

グループ討議テーマ

I：教育と連携「生物多様性の保全に向けた大学と地域の連携ー生物多様性保全の重要性ー」
今回からSDGsの実現に向け大学・学生・地域が一体となった生物多様性の維持や保護活動を行います。
1)国際はアフリカ・ケニアの生物多様性、環境保護と観光など人国活動との両立について学び、意見交換します。
II：化学物質「新たな化学物質規制体系に向けた対応について」
前回のグループ討議で取り上げた、化学物質規制体系の見直しについて、新たな情報等をもとに、複数のグループに分かれて、テーマに応じた意見交換などを行うことを予定しています。

III：施設・設備「大学施設で実現可能なZEH化改善について(案読編)」
既存施設のZEH化改善計画の実現期として具体的な事業を交えて討議・意見交換を行います。また、TCFDの取り組み、新冷媒(R32)への移行などについて情報提供も行う予定です。

私立大学環境保全協議会 申込はこちら
<https://shidaikankyo.jp>

CONTENTS

環境ニュース	2
会員校紹介●上智大学	4
会員校紹介●筑紫女学園大学	5
賛助会員紹介●東京パワーテクノロジー株式会社	6
会員MAP	7
コラム、事務局だより	8



グループ討議会場の様子

福岡大学 環境保全センター 平田 修 准教授 インタビュー



青々とした海が消えるかもしれない 高校生の私を突き動かした危機感

潮風の匂い、魚の躍動、水を切る小石の音……。そうした原体験がやがて、“環境研究者”という人生の方向を形づくっていきます。福岡大学環境保全センターの平田修准教授が、環境保全に関心を持った原点を感慨深げに振り返ります。

「父親の転勤に伴い九州各地を転々とする子供時代を過ごしましたが、引っ越し先の傍には豊かな海や川があり、休みの日になると銚子を持って海中に素潜りして魚を追っていました。清冽な水と潮流の感触は、何よりの遊び場でしたし、自然の奥ゆかしさに包まれる感覚を味わえる時間でもありました」

そんな自然を身近に感じる日々のなか、高校の夏、平田准教授にひとつの危機意識が芽生えます。

「連日報道されていたフロンガスによるオゾン層の破壊や地球温暖化問題といった地球規模の“環境問題”に加え、油まみれの海鳥や富栄養化による赤潮の発生など海域におけるニュースが映し出され、僕が知っている“あの豊かな海は同じままでいられるのか?”という疑問に、胸の奥が揺らぎました。それが次第に『美しい海を守るには学理に基づく知見が必要になる』という想いになり、研究者の道へと繋がっていきました」

高校を卒業して熊本大学土木環境工学科に入学した平田准教授は、大学2年生のときに1年間休学します。アフリカやヨーロッパなど、バックパッカーとして世界20カ国以上



留学時代の仲間たち

を放浪するなかで、“自然の保全”という意識が強くなる一方で、日本の高い産業技術力も世界に発信していきたいと思うようになったといいます。そこで、

海外に通用する国際力を磨くため、イタリア国立パドヴァ大学工学部環境工学科への留学を決意します。

イタリア留学では、いい意味でカルチャーショックを受けたそうです。

「熊本大学を訪れていたイタリア人教授の『みんな英語を話せるから安心して来いよ』という陽気な誘いに乗って渡航したら、実際は英語がほとんど通じず。日常生活を送るのにも本当に苦慮しました。また、時間もルーズだから約束もだいたい守らない(笑)。慣れるまで生活のし辛さはありませんでしたが、ただそれ以上にイタリア人の生き方そのものに惹かれました。“La vita e` bella.(人生は美しい)”という古いイタリアの言い回しには、ただの楽観ではない、歴史と哲学のにじむ人生観が根付いていて、労働ひとつ取っても、働くことを目的化しがちな日本と違い、人生を豊かにする手段として捉えていた。日本に住んで20年経つイタリア人の妻からは『今年のパカンスは、2か月取れるんでしょ』と、いまだに冗談交じりに言われることもあります(笑)」

身近な自然と世界の多様性が、平田准教授の環境へのまなざしを深めていったそうです。

日本の技術の世界へ “福岡方式”を世界に発信する

2005年に福岡大学に来るまで、排水の窒素除去に関する研究や、バイオマスを用いたメタン発酵の研究に没頭していた平田准教授。福岡大学では、日本の廃棄物最終処分場の代表的な埋立構造になっている“福岡方式”と呼ばれる準好気性埋立構造の世界への発信に尽力してきました。

「この福岡方式は、福岡大学で研究・開発された埋立構造です。埋立地の底部に設置した浸出水集排水管を通して外気を廃棄物層内に取り込むことで微生物が活性化し廃棄物分解が促進されます。これが埋立地からの浸出水(排水)の浄化に繋がり、さらに、温暖化に影響するメタンガスの発生も抑制することができます。また、発展途上国ではドラ

ム缶や竹といった
現地調達可能な安
価な資材を使って
導入する事も可能
です」

つまり福岡方式
は、高度な技術や
機器を必ずしも必

要とせず、低コストでも建設可能な地球にもやさしい埋立
技術です。平田准教授が、この技術の研究に至ったきっか
けは留学先のイタリアでの出会いにあります。

「国際シンポジウムの事務局業務に関わっていた際、恩師
である松藤康司教授に誘われて、2005年から、福岡大学
でお手伝いさせて頂くようになりました。当時、国内では



国際学会での発表風景

一般的な埋立構造でも
世界では認知度が低い
技術だったので、この
技術を世界中に発信し
ようと私を含む国内の
研究者が沢山の国際会
議で研究発表を続けて
きました。

その努力が功を奏し、2017年にイタリアのサルデーニャ
島で開催された『第16回国際廃棄物管理・埋立シンポジウム
(16th International Waste Management and Landfill
symposium)』で「準好気性埋立構造(Semi-Aerobic
Landfill)」のタイトルで松藤教授が学
会特別賞を受賞して、世界的に認知さ
れたときは、まさに
感無量でした」



特別賞受賞写真(左:松藤教授)

また、平田准教授
は同大学の環境保全センターで専門員室長を務められてい
ます。同センターでは、排水調査、廃棄物調査、化学物質管理、
省エネ活動など、大学内における環境保全に関するあらゆる
調査・取り組みを行っています。これまでに様々な取り組み
に関わってきた平田准教授ですが、中でも思い出深かつ
たのが、今から15年前の2010年頃に行った「薬品管理シ
ステムの導入」だそうです。当時をこう話します。

「福岡大学は9学部31学科ある総合大学で、実に多種多
様な薬品が使われています。その一方で、こうした薬品の管

理体制が課題となっていました。そこで、一元化を目的に
薬品管理システムの理系学部への導入を行った。ただ、学
内の研究室に保管されている試薬は数万本。目の前に広がる
膨大なデータと向き合い、数か月にわたってひとつひとつ
を丁寧に入力していく登録作業は、根気と労力を要するも
のでした。しかし、この地道な作業があったからこそ、今
では薬品の使用履歴の管理、作業環境測定の対象研究室の
抽出、さらには監督官庁への報告といった多岐にわたる業
務を円滑に進めることができるようになっていきます。形には
残りにくい取り組みでしたが、“安全と信頼の基盤を築く”と
いう意味で、とても意義深い経験でした」

現在は、2022年に福岡大学が設置したカーボンニュート
ラル推進拠点の脱炭素キャンパスチームのチーム長として、
太陽光パネル導入の検討や全照明のLED化など、2050年
のカーボンニュートラルに向けたエネルギー使用量の削減
とCO₂排出量の削減に向けて奔走している日々を送られて
います。

「教える」でなく「共に学ぶ」 フィールドで引き継ぐ環境保全のバトン

“協働の学び”こそ、平田教授の教育の原点になります。

「私自身が研究を続ける身ですから、すべてを知っていると
は思っていません。正直、教えるという意識は強くなって、む
しろ学生たちと一緒に考えて取り組みながら問題解決を図つ
ていくというスタンスのほうが自分にはしっくりきています」

はにかんだ表情を覗かせながら平田准教授は続けます。

「理学部の学生に対し「環境化学」の授業を持っているので
すが、環境保全センターでは実業務が優先でいわゆる“講
義”のような形で教育に関われる時間が少ないんです。だから
学生たちには机上の理論的な講義というよりも、実際の
業務はこんなに臭くてきつい、でもこんなに重要なんだよ
といった、現場の声を紹介することを大切にしています。ひ
とりでも多くの学生に、環境保全に関心を持ってもらい、
環境研究のバトンを託せたら嬉しいですね」

大切なことは自分の足で現場に行って学ぶ。ここに平田
准教授ならではの教育の形が息づいています。

編集後記

料理を作るのが好きな平田准教授。週末は妻に感謝の気持ちを
込めて料理を振舞うことも。家族からの好評なのは、水をほとん
ど使わない“パパカレー”。また、子どもたちを海に連れていくこ
とも多いそう。「魚を釣ったら捌いて料理をするまでが釣りだぞ」と話
す平田准教授からは生き物への敬意が感じられました。

会員校紹介

このページでは毎回、会員である大学の環境問題への取り組みを紹介していきます。

上智大学



四谷キャンパス7号館(右)と、あおぞら銀行本社も入る6号館

大学紹介

上智大学は、1913年にカトリック男子修道会「イエズス会」によって設立されました。学生数わずか15人からのスタートでしたが、現在は9学部29学科を擁する総合大学に発展しました。キリスト教ヒューマニズムに基づき、世界のイエズス会学校に共通する「For Others, With Others（他者のために、他者とともに）」を教育精神に掲げ、他者に寄り添い、社会のために奉仕する心を持った人を育てることに力を注いでいます。また、国際通用性を強く意識した教育研究活動を行い、多様性を尊重したグローバルキャンパスで、文化や言葉、世代や学問の壁を越えて世界をつなぐ人材を輩出しています。

上智大学を運営する学校法人上智学院では、「上智学院サステナビリティ推進宣言」を策定し、環境(E)、社会(S)、ガバナンス(G)に関連する重要課題を設定。中長期計画「グランド・レイアウト3.0」と合わせて、サステナビリティに係る施策を推進しています。

※サステナビリティ推進宣言：

<https://www.sophia-sc.jp/sustainability/>

カーボンニュートラルに向けた取組

上智大学では、SDGs実現を目指す取組の一環として、脱炭素化に向けた取組を加速させています。2020年6月には、四谷キャンパスで消費する電力の約95%を再生可能エネルギー100%の電力に切り替えました。2022年3月には四谷キャンパス全体、2023年11月には目白聖母キャンパスと秦野キャンパスも、再生可能エネルギー100%の電力の導入を実現しました。

2021年度には、四谷キャンパス及び目白聖母キャンパス



ポスターを使ってオフサイトフィジカルコーポレートPPAを学生にアピール

で消費する都市ガスについてカーボンオフセットLNGを導入。2022年度の時点で、一部施設を除き、電気及び都市ガスの使用に伴う温室効果ガスの排出量をゼロに近づけること(脱炭素化率 約94.9%)ができています。

さらには、太陽光発電由来の電力供給に係るオフサイトフィジカルコーポレートPPA（以下「本PPA」）の契約に基づき、上智大学で最もエネルギー消費の多い四谷キャンパスへの電力供給を2025年2月から開始しました。

本PPAでは、上智大学の為に新設された太陽光発電所において、その発電された再生可能エネルギー自体の総量を増やすことに寄与する「追加性」のある電力が、四谷キャンパスに供給されています。この追加性のある電力に加え、上智学院では事業者が使用電力を100%再生可能電力で賄うことを目指す国際的なイニシアチブ「RE100」の報告に対応可能なトラッキング付非化石証書を全量付与した電力供給を受けています。

また、上智学院では、環境(E)、社会(S)、ガバナンス(G)を考慮したESG投資に積極的に取り組んでいます。2015年には、国連責任投資原則(PRI)に国内の大学として初めて署名し、以来、国内外のファンドに対しESGを重視した投資活動を行っています。(https://www.sophia-sc.jp/disclosure/esg/)

ダイバーシティ・サステナビリティ推進室の学生職員の活躍

本学は、2021年に「サステナビリティ推進本部」を立ち上げました。エネルギー効率の向上やキャンパス環境の整備などを推進するため、部局横断型のバーチャルな組織として始まりましたが、特筆すべきは、「学生職員」を雇用し、職員と共にさまざまなプロジェクトに関与している点です。学生職員は、施設改善や環境負荷低減への取組、サステナビリティに関する情報発信などの業務に取り組んでいます。これまでに、①車椅子の方や色覚障害のある方などにも視認しやすいサイン作り、②ウォーターサーバーを導入し、ペットボトル使用量を減らしてプラごみを削減、③廃棄物の分別に関する啓発活動を職員と一緒にやり、リサイクル率の向上を図る、などの取組を実現しています。また、企業とのコラボレーションを積極的に行ったり、『SDGs & サステナビリティレポート』を作成したりするなど、社会と大学とをつなぐ活動にも力を入れています。

2024年7月には、ダイバーシティ推進室とサステナビリティ推進本部が統合し、新たに「ダイバーシティ・サステナビリティ推進室」が設置されました。学生職員も同室に在籍し、引き続きさまざまな活動に従事しています。

(https://diversity-sustainability.sophia.ac.jp/)

また、SDGsへのコミットに特化した学生課外活動団体も増えており、それぞれのフィールドで独自の活動を展開しています。



学生職員が手掛けた、ユニバーサルデザインを考慮したキャンパス総合案内サイン

筑紫女学園大学

“しなやかでゆるぎない” いのちがそだつ場所に

筑紫女学園は、地元では“筑女”の愛称で親しまれています。1907（明治40）年に私立筑紫高等女学校として創立し、2027（令和9）年に創立120周年を迎えます。「親鸞聖人が明らかにされた仏陀（釈尊）の教え、すなわち浄土真宗の教えにもとづく人間教育」を建学の精神とし、校訓である「自律」「和平」「感恩」は、その精神をあらわしたものです。1988（昭和63）年に筑紫女学園大学が開学し、1世紀以上にわたって「知と心の女子教育」を継承しています。文学部、人間科学部、現代社会学部の3学部3学科で構成され、新たな時代に適應できる人材育成に努めています。



個々の可能性を探る学びの場

本学は、古都、福岡県太宰府のまち並みと宝満山を見晴らす眺めの良い丘の上にあります。大宰府政庁跡、観世音寺、太宰府天満宮など、古代からの歴史を伝えるこの街には、国内はもとより世界各地からの訪問客が絶えず、さまざまな言語が飛び交っています。歴史と未来が行き交う文化の交差点で、人間の多様性と成長の可能性を探る学びの場が、ここに 있습니다。

第一に、「自己肯定感をはぐくむ場所」です。「わたしの好き」を起点に自主的なフィールドワークを通して、互いを認め合う、他者とめぐり合うことのできる場所です。第二に、「仏教、浄土真宗の教えを体感する場所」です。3つの校訓を通して、現実の複雑な問題を乗り越えて、安心できる居場所が自然と培われる場所です。第三に、「人に寄り添うひとを育てる場所」です。ドアーズ（踏み出す力）、スキルズ（つながる力）、コア（寄り添う力）の共通科目や実践力を身に付ける専門科目で、社会人基礎力と豊かな人間性が身につく場所です。

社会における女性の活躍支援

学生だけでなく、社会人等の方を対象とした「女性のための



ステップアップ・プログラム」を開設し、社会における女性の活躍を支援しています。「キャリアスキルを高めるプログラム」「多様性が尊重される社会を作るためのプログラム」「日本語教育の基礎的な知識とスキルを身に付けるプログラム」で、体系的な知識や技能の修得を目指します。筑女から社会を変える、世界を変える活動を広げています。

数字でみる筑紫女学園大学

「面倒見が良い女子大」九州の女子大で1位^{※1}
「小規模だが評価できる女子大」西日本の私立女子大で3位^{※2}
小学校教諭現役合格率93.8%（2024年度）
中学校・高等学校教諭現役合格率55.6%（2024年度）
幼稚園教諭就職者数西日本4位^{※2}
保育士就職者数西日本5位^{※2}
就職内定率98.8%（2023年度）
海外協定校10カ国・地域21大学
ボランティア活動参加者数272人（2023年度）
海外留学・海外研修者数144人（2023年度）

^{※1}大学探しランキングブック2025（大学通信）

^{※2}大学探しランキングブック2023（大学通信）

賛助会員紹介

東京パワーテクノロジー株式会社

東京パワーテクノロジーは東京電力グループの中核企業として、長年にわたり発電プラント事業ならびに環境インフラ事業などに携わっています。その豊富な経験と電力設備で培った専門的な技術力を活かし、調査から提案、計画、建設、オペレーション & メンテナンス、さらには改良から撤去に至るまで、プラントライフサイクルにおける「安全運営」と「コストの最適化」に貢献するトータルなエンジニアリングサービスを提供します。プラントライフサイクルを支える多様な技術力を融合させることで、新しい領域へと歩み続けます。

環境インフラ事業

コンサルティング・調査・分析・運営管理をワンストップで提供

- 環境アセスメント
- 環境緑化・・・多くの私大さまの緑地の付加価値向上実績がございます。
- 環境化学分析
- 再生可能エネルギー（水素、風力、水力等）
- 発電所副産物の再資源化（太陽光パネルリサイクル等）
- 地震観測
- 福島復興関連業務
- 企業保険契約
- 尾瀬国立公園の自然保護・保全
- 尾瀬山荘運営・・・環境学習、探求学習、チームビルディングにご活用ください。

火力産業プラント事業

火力発電所リブレース
福島復興電源・新規電源建設
メンテナンスに対応

- EPC、O&M
- オーナーズエンジニアリング
- 発電所メンテナンスの効率化
- 火力発電所リブレース
- 中小新規電源建設・メンテナンス

原子力事業

エンジニアリング力
分析技術力を提供

- 事故炉の安定化・廃炉作業
- 放射性核種分析技術
- 放射線管理技術
- 雑固体廃棄物焼却設備設置・運転・メンテナンス
- 原子力発電所安全対策工事

私立大学環境保全協議会の皆様

小さな取組みでも皆様と連携することにより大きな環境価値を創り出せると考えます。
電力産業で培った環境技術と皆様のお考えを繋いで環境問題を解決しましょう。

尾瀬に泊まろう！

0278-58-7311

（受付時間平日9:00~17:00 土日・祝日除く）



採用に関するお問合せ先

03-6372-7040

総務部人材開発グループ採用担当



 **東京パワーテクノロジー株式会社**

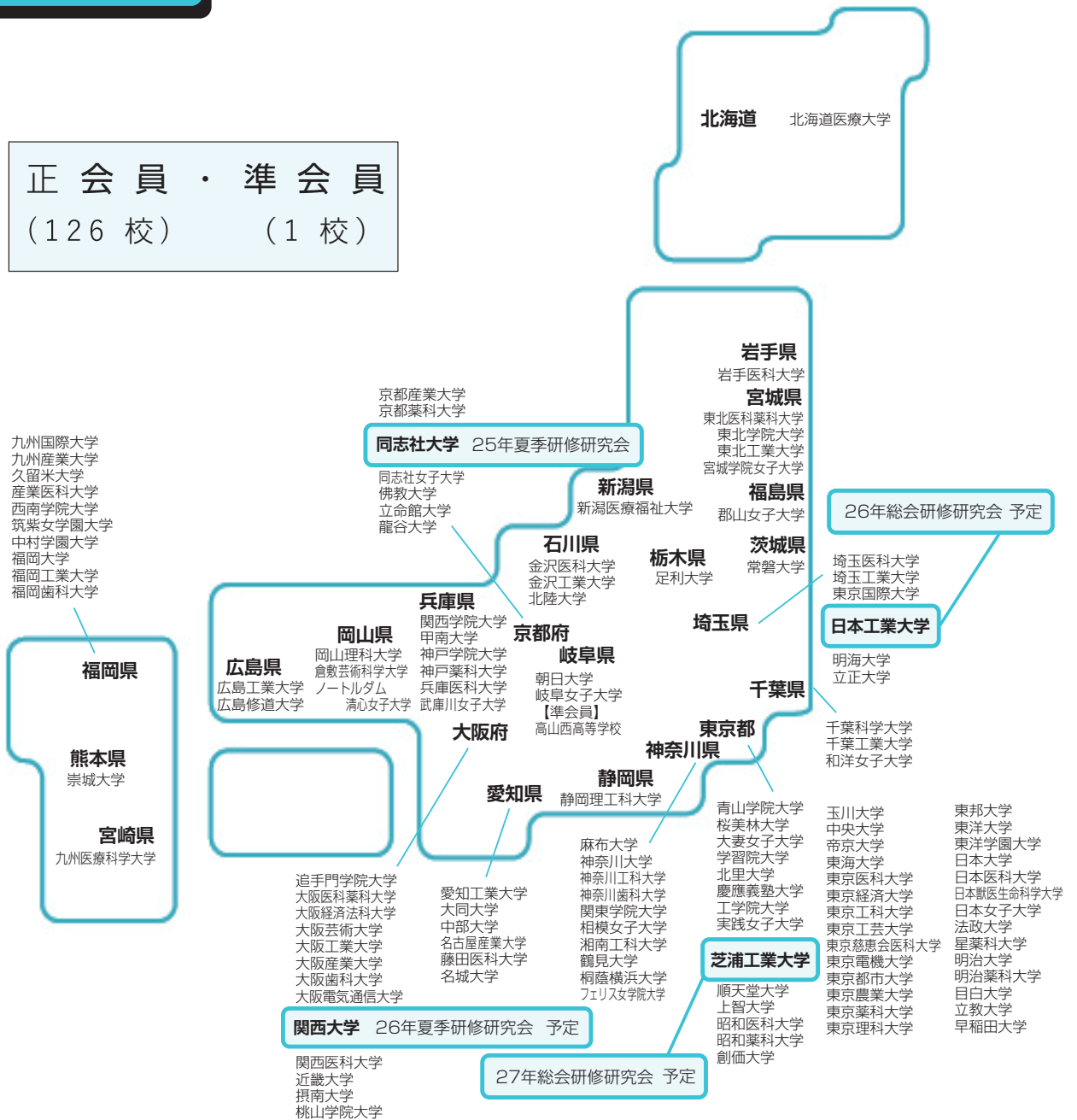
〒135-0061 東京都江東区豊洲五丁目5番13号



会員MAP

2025年3月31日現在

正会員・準会員
(126校) (1校)



賛助会員 (50社)

<ア行>

アサヒブリック株式会社
アズビル株式会社
アネス株式会社
アポロオフィスシステム株式会社
株式会社イージーエス
エコシステムジャパン株式会社
有限会社エナテック
大阪薬研株式会社
株式会社オオスミ

<カ行>

株式会社環境管理センター
株式会社環境技研
株式会社環境向学
株式会社環境テコム
関東化学株式会社
株式会社研恒社
広陽サービス株式会社

<サ行>

三建設工業株式会社
三友プラントサービス株式会社
島津トラステック株式会社
清水建設株式会社
ジャパンウェイト株式会社
全国大学生生活協同組合連合会
株式会社そごう・西武

<タ行>

ダイキン工業株式会社
株式会社タイセキ
株式会社ダルトン
株式会社ダルトンメンテナンス
東ガスエンジニアリングソリューションズ株式会社
東京電力エナジーパートナー株式会社
東京パワーテクノロジー株式会社
東京美装興業株式会社
東北緑化環境保全株式会社
東洋ワーク株式会社
株式会社巴商会
株式会社日経サービス
株式会社日建設総合研究所
日本ケミカルデータベース株式会社
一般財団法人 日本冷媒・環境保全機構
Newton プラス株式会社
野村興産株式会社

<ハ行>

株式会社ハチオウ
阪和興業株式会社
株式会社日立産機テクノロジーズ
株式会社富士真空分析センター
富士フイルム和光純薬株式会社
三菱地所リアルエステートサービス株式会社
ミヤマ株式会社
ヤマト科学株式会社
理研計器株式会社
早稲田大学生生活協同組合

コラム

アンパンマン生みの親やなせたかしさんと奥様をモチーフとしたNHK朝ドラ「あんぱん」が今年4月から始まった。そのやなせたかしさん生前86歳のインタビューをNHKラジオ番組で聞いた。ご自身の戦争体験で、アンパンマンの根底には悪者や怪獣を倒すだけのヒーローではなく、まず先に飢えている人を助けることがあるそうだ。

SDGs目標1は貧困をなくす、目標2は飢餓をゼロにする。世界各地の紛争や地球温暖化などによる自然災害の頻発で多くの難民や被災者が飢えている。この現況を救うアンパンマン的リーダーが世界各地に数多く現れて欲しいと切に願う。

貧困の原因の一つは経済格差。世界不平等研究所が発表した「世界不平等レポート2022」によると世界トップ10%の裕福な家庭が所有する富は全体の75.6%を占めており、ボトム50%の貧しい家庭が所有する富は全体の2%に過ぎない、との記事がネットにあった。富める人がますます富んで、貧しい人がますます貧しくなる格差拡大が今後どこまで進むのか悩ましい。富める人には富の拡充を

セーブして貧困、飢餓をなくす活動に手持ち財を割り充てて欲しい。

日本でも格差社会の問題が広がって、厚生労働省によると2021年の子どもの相対的貧困率は11.5%で、子どもの9人に1人が貧困状態にあるといわれている。それに子どもの人口減少も大きな問題だ。5月4日には15歳未満の子供の数が4月1日現在で1355万人と、去年より35万人減って1400万人を割り込み、44年連続の減少となった。総人口に占める子どもの割合も11.1%と過去最低となり、1975年から51年連続の低下になったとのニュース報道があった。貧困状態で十分な教育を受けられない子どもの存在と日本の将来を担う子どもの減少の改善解決は簡単ではないが、政策に託してばかりでなく、自分なりのアンパンマン的行動も必要だ。まずは日ごろの飲酒代とリタイア生活で余裕ができた時間を少し割いて支援活動に当てようと思う。

私立大学環境保全協議会名誉会員 落合 澄
(元早稲田大学 職員)

事務局だより

【同志社創立150周年記念】第38回 夏期研修研究会ご案内

【会 場】同志社大学今出川校地

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

TEL:0774-65-7773(環境保全・実験実習支援センター事務局)

【プログラム概要】

【第1日】 2025年8月28日(木)

<研修研究会> 13:00~17:10
(情報交換会 17:30~19:00)

1. 開会挨拶
2. 開催校挨拶
3. 特別講演

「希望を耕す ラーニングガーデンと学生の自然観」

同志社大学 社会学部 教育文化学科 准教授
ビリー・スティーブソン

4. 研修講演

「持続可能な地域づくりの視点からの資源化技術」

同志社大学 理工学部 環境システム学科 教授 赤尾聡史

5. グループ討議

※Ⅰ～Ⅲグループから一つ選択してご参加ください。

Ⅰ：教育と連携

「地域と大学の連携・協働による地域のソーシャル・イノベーション」

地域と大学、学生の連携・協働による、SDGs 実現のための地域のソーシャル・イノベーションについて、同志社大学の中島恵理教授のご研究や実践例をもとに、討議します。

Ⅱ：化学物質

「新たな化学物質規制体系に向けた対応について」

前回までのグループ討議で取り上げた、化学物質規制体系の見直しについて、新たな情報等をもとに、複数のグループに分かれて、テーマに応じた意見交換などを行うことを予定しています。危険予知等に関する演習も企画検討しています。

Ⅲ：施設・設備

「再生可能エネルギー 100%キャンパス実現に向けた課題と解決策」

再エネ100%キャンパスの実現に向けた課題とその解決策

を、先進事例の紹介、実務者視点での討議、参加者同士の意見交換を通じて深掘りします。

6. 情報交換会(立食)

【第2日】 2025年8月29日(金)

<研修研究会> 9:30 ~ 12:20
(キャンパス見学会 12:30 ~ 13:30)

1. グループ討議(前日より引き続き討議を行います。)
2. 講演

京都市環境政策局地球温暖化対策室脱炭素地域創出促進部長
川崎 明浩

3. 講演総括
4. キャンパス見学会

講演会は、オンサイトのほか、オンラインライブ配信、後日のオンデマンド配信を予定します。(要事前申し込み)。グループ討議、情報交換会及びキャンパス見学会はオンサイトのみとなります。講演会・グループ討議の詳細は、開催案内(7月配信予定)にてお知らせいたします。プログラムは変更となる可能性がありますので、最新の情報を協議会ホームページにてご確認ください。なお、講演会来場者への資料配布は行いませんので、事前配信資料をご利用ください。

私大環協ニュース

第78号 2025年6月発行

発行・編集



私立大学環境保全協議会
Environmental Protection Association of Private Universities

〒169-8555

東京都新宿区大久保3-4-1 早稲田大学環境保全センター内

TEL & FAX 03-5273-9605

印刷 (株)研恒社

